8月4、5日 大分大会特集⑥

Newspaper In Education

NIE 教育に新聞を 全国大会

教育への新聞活用を探る第21回ＮＩＥ全国大会大分大会が８月４、５の両日、大分市のホルトホール大分などで開かれる。スローガンは「新聞でわくわく　社会と向き合うＮＩＥ」。新聞と出合う幼稚園から社会とつながる大学まで、発達段階に応じた県内の実践例を報告する。

別府大学（別府市）

世の中を知るために

当日の新聞を使って興味のある内容を探す学生たち

別府大学の食物栄養科学部から教員免許の取得を目指す学生の必修科目「生徒指導論」。全15回の講義で、本年度前期は13人が受講している。第7回の講義。担当の佐藤敬子教授が「早速新聞を見ましょう。気になったニュースは何ですか?」と問い掛けた。

この日の講義テーマは「青年期の心理と発達」だが、講義に関係しそうな記事だけではなく全部のページを読ませる。

佐藤教授は「教員とは世の中のことを伝える仕事。世の中を知らないというのはあり得ない」。必ず当日の新聞を使い、ニュースの〝鮮度〟にもこだわる。この科目に限らず、同大学は全学的に新聞を使ってキャリア教育を拡充。1年生の「キャリア教育Ⅰ」で新聞の読み方を学んで記者の仕事についても考え、2年生の「Ⅱ」では時事問題を考えるなど、新聞が進路支援の強化アイテムになっている。

〝鮮度〟にもこだわり

学生はそれぞれ、気になった記事の見出しを提示。教育や子どもを扱ったニュースだけでなく、国際政治や経済ニュース、地域の話題を取り上げる学生もいた。学校教育に関係がありそうな記事も探索。意外と多く見つかり、驚いていた。

佐藤教授は紙面の中から、高校中退者の中退理由などをまとめた2014年度の実態調査結果の記事を紹介した。最も多かった理由が不登校だったことに関連し「学校を少しでも辞めたいと思ったことは? 皆さんはなぜ辞めなかったの?」と学生に尋ねた。「親に言えない」「行くのが当たり前と思っていた」…。いろいろな理由が挙がった。

青年期は自我の発達に伴う人間関係の複雑化に環境の変化などが加わり「中1ギャップ」などに象徴される周囲との摩擦が起きる。「対症療法ではなく〝健康体〟をつくることが生徒指導のミソ。大事なのは背景。いろんな要因がごちゃ混ぜになって行動に現れるからこそ、世の中を見ないと解決できない」と力説。「視野を広げて社会に目を向けると、子どものことも見えてくる。それができる教員になってほしい」と締めくくった。

（大分大会特集終わり）

気になった記事について意見を交わす

取り組みの狙い

社会と自分をつなぐ

佐藤　敬子教授

「記事の裏側を読み取る読解力も大事」と佐藤敬子教授

本学は全ての学生が社会や職業へと幸せな形で巣立てるよう、自立の基盤となる能力を養っている。アクティブラーニングを重視し、社会で評価される知識や能力を育てる体系的なキャリア教育を実施し、キャリア教育科目も拡充している。その一つとして、時事問題に取り組むために新聞を読む活動を取り入れている。世の中で起きていることや社会の流れを把握することで、社会と自分をつなぎ幅広い教養を身に付ける講義などをしている。

コミュニケーション能力とは発信する力ではなく、まず受信すること。そのために記事に興味を持ち、何を伝えようとしているのかを分かろうとすることや、相手に分かってもらおうとする力を育てるため考えを文字にして投稿するなど、新聞を使った授業は極めて効果的だ。

教職科目の「生徒指導論」など、学校教育における生徒指導の理論は押さえつつもそこだけに特化せず、社会全体に興味を持ってもらいたい。教員は人を育てる職業。世の中を知るためには記事の裏側を読み取るなど、読解力も大事になる。自分を伝え、相手の気持ちを分かろうとする力は、どんな職に就いても必要。新聞は最良の教材だ。

リレーエッセー 実践から

子どもの姿にヒント

田辺　玲子

「今日習った『の』の字がこんなにあるよ」。小学校1年生が大人の新聞を広げながら。

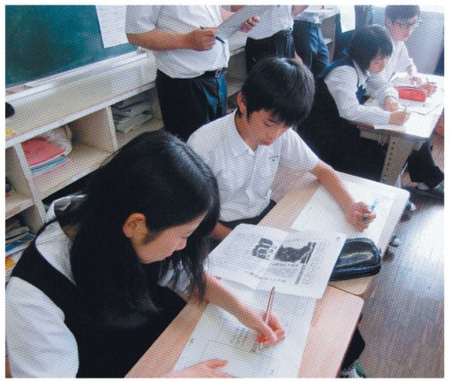
「この記事使って問題が作れるよ」。小学校5年生算数の時間。

「18歳選挙権について、A君ってこんなふうに考えるのか。1人で新聞読むと読み流してしまうけど、みんなで読んで話し合うと、読み深められるなあ」。

中学校2年生が国語の授業の振り返りで。

「驚き、わくわく感、感嘆」のある授業は子どもたちにとっても、教師にとっても魅力的な時間だ。付けたい力を確かに付けていくために、いかに授業を魅力あるものにするか。授業づくりの要である。

教科書を中心に据えながら、新聞をひと味加えると、これまでにない味わいの授業が生まれる。新聞が加わることで、多様な考えや表現との出合い、深い対話、協働的な作業などが、学習場面としてより具体的に浮かび上がる。



記事を基に意見を交わし合う東中津中学校の3年生

新聞を手に考え、語る子どもの姿は、私たちに授業づくりの多くのヒントを与えてくれる。

（中津市教委学校教育課指導主事）

学生の感想

身近なことの側面考えるように

▽田中はる菜さん（3年）

新聞を使う授業では毎回新しいことができ、ニュースを見る癖がついた。身近なことでも「こんな側面があったのか」と、何でも考えるようになった。自分をしっかり持つとともに周りの意見も聞き、社会に必要とされる存在になりたい。

気付かなかったことに気付けた

▽梅木美香さん（3年）

以前は新聞に興味がなかったが、読んでみると面白く、コンビニで各紙の1面見出しを見比べるようになった。相手の立場で考えが分かるようになったり、今まで気付かなかったことにも気付けるようになってきた。自分の意見を持った社会人になりたい。